

高齢者と若者を繋ぐ地域活性化を目指した
福祉サービス事業者としての取り組み
-民間事業者と地域が手を組むこれからの介護-

○ 有限会社あらたケアサービス 氏名 荒川 泰士 (会員番号 8706)

北川 裕美子 (香川短期大学・会員番号 6706)

キーワード3つ：地域活性化、高齢者、介護福祉

1. 研究目的

本発表では、超高齢化・過疎化が進む高知県四万十市（以下、四万十市）で報告者が行っている訪問介護事業を軸に、地域の高齢者と若者や子どもたちが関われる活動を取り入れたことにより、若者や子どもたちが高齢者の生活や生きがいを考え、地域活性化に繋がっていった取り組みの内容や活動のプロセスについて報告する。

具体的には、実際に取り組んでいる事業の中でも、「高齢者用宅配弁当事業」、「お助け代行サービス（家事代行サービス）」、「子どもたちに夢を」をテーマに子どもたちや若者の夢を支援する「あらたドリームプロジェクト事業」からなる取り組みについて述べ、これからの四万十市における地域福祉の在り方について考察していく。

2. 研究の視点および方法

報告者は2005年8月に弊社を設立し訪問介護事業所として事業を始めたが、訪問介護を展開していく中で、特に過疎化が進む四万十市が抱える問題の1つである、中山間地域と市街地のコミュニティにおける衰退化に着目し、四万十市と協力するなどして様々な現地調査を実施してきた。調査方法としてはインタビュー調査が中心であった。本発表では、①訪問介護事業の利用者、その家族や近所の方、民生委員、各地区に入って介護保険制度セミナーや転倒予防セミナー等を行っているボランティア団体等に対するインタビュー調査、②高知県四万十市の小学6年生20名に対して行ったインタビュー調査、③前述した報告者が独自で行っている「あらたドリームプロジェクト事業」に携わっている14～19歳の若者5名に対し報告者が行ってきた活動や取り組みについて報告する。

3. 倫理的配慮

調査対象者に対し、日本社会福祉学会の倫理規定に準拠したインフォームドコンセントの内容について説明した。具体的に、本調査における目的以外の使用、個人が特定されるような使用を行わないことを前提にインタビュー調査に対する承諾を確認した。その内容を明文化した文章を提示した上で記録を残すことを含め了解を得た。

4. 研究結果

インタビュー調査を実施した結果、小学6年生20名に「3世代で生活しているか」等の質問に対し、「3世代で生活をしている」と答えた生徒はわずか2名であった。また、ボランティア団体にインタビュー調査を行った結果、「地域に住む高齢者も、自分が住む地域に若者がおらず、若者や子どもたちと関わることがない」などの発言があるなど、四万十市において若い世代が高齢者と関わる機会が少ないことが明らかとなった。

そのような現状に対し、報告者が行っている取り組み事業の1つである「あらたドリームプロジェクト事業」では、10代の若者が「地域を活性化したい」という思いで、歌やダンスを通して、有料老人ホームや病院に慰問に赴き、高齢者とかかわるなど様々な活動を行ってきた。地域や福祉、介護に関する知識が全くなかった彼女らに対し、「福祉」や「介護」についてどのように考えているのか定期的に話し合う場をつくり続けてきた。その結果、彼女らの中には「高齢者と関わる仕事がしてみたい」と考えるようになり、実際に高校を卒業した後、高齢者専用宅配弁当事業を行いながら、現在も、毎日高齢者とかかわり日々勉強している者もいる。彼女が持ってくる弁当を待っている高齢者からも、「若い人が毎日弁当を持ってきてくれるのが楽しみ」と高く評価を得ている。また、「介護の資格を取得し、介護の仕事に就きたい」と思うようになり、介護職員初任者研修の資格取得を目指し専門学校に通い始めた者もいる。

さらには、彼女らが慰問に行った施設職員からは、「入居者の笑顔が絶えず、久しぶりに若者と関わったことで元気を取り戻した」という声も聞こえてくるようになった。

報告の際のポスターには、より具体的な活動内容やプロセスがわかるよう、図や写真等を使用し説明を行う予定である。

5. 考察

介護や福祉の対象となる高齢者だけに限らず、その地域で暮らす若い世代にも活動対象の範囲を広げた事業を積み重ね行っていくことによって、地域で暮らす高齢者や若い世代の日常生活や価値観等に変化をもたらす可能性がうかがえた。

少子高齢化が切実な四万十市の現状を地域住民が受け止め、その中でどのようにして地域を活性化してくかという取り組みを行政も企業も考える必要がある。高齢化率が30%を超えようとする四万十市を支えていくのは、次世代を担う若者であり、若者と高齢者が様々なところで関わり合い、若者が高齢者を支えていこうとする意欲が高まるような地域でなければ、超高齢時代を目の前にした現在、衰退の一途であろう。

また、人口の減少が著しい地域の中で、若者が先頭に立ち、地域住民を引っ張っていけるような地域になれば、若者のみならず、高齢者や様々な世代における四万十市への移住をも期待できるのではないだろうか。今後も高齢者と若者が元気に暮らすことが出来る魅力ある地域づくりのためのモデル事業として展開していけるよう活動・研究を続け、研鑽を積み重ねていきたいと考える。